

2010年
7月7日
水曜日

土井教之 教授（産業組織論）

競争と教育

近年話題となっているのは、フィンランドの教育、韓国の激烈な受験競争、日本の教育の混乱などである。これらに関連して共通する問題は、「教育における競争」である。

近年、世界的企業のノキアでも有名なフィンランドの教育が、「高い学力と落ちこぼれが少なく」と話題になり、混乱・疲弊する日本の教育との対比で注目されている。そのとき、教育に競争がないことが強調される。

たまたま以前フィンランドに行き、ヘルシンキの空港から市内に行くリムジンバスの中で、前の席の2人が、職場（話から政府機関で働いているらしい）での競争が厳しいという会話をしていた。他のヨーロッパ諸国から来る人もいるらしい。

それに関連して興味をもったのは学校での競争です。当地で聞きますと、「子供たちが強く海外を意識して学習している」ことでした。兵庫県よりも小さい人口で、500万人強の小国が生きてゆくためには外国との競争に対応しなければなりません。ましては、この国はEUの加盟国であり、地域統合に組み込まれているのです。また、大学は3校しかなく、

外国の大学への進学を考える生徒も多い。そこには、「強力な競争意識が働いているのではないか」、あるいは、「巷間言われるように、競争原理のない教育が行われているから高い教育パフォーマンスが実現されていると考えるのは少し違うのではないか」と考えました。むしろ、「競争環境下の教育」と捉えるべきであり、こうした競争意識が高い教育水準を支えている一因ではないだろうか。

ところで、経済学は、市場経済では、競争原理を基本として、強制原理（規制）、組織原理（企業内部）、協調原理（協業）を追加して機能することを説明している。自由で公正な競争は、経済資源の最適資源配分と政治的民主主義の経済的基盤（市場の仕組みは選挙投票の仕組みと対応し類似）を与えるメリットをもつ。他方で、もとより、競争のデメリット（市場の失敗）も発生することは言うまでもない。こうしたことは経済学の基礎知識です。

一般に、日本では、競争のメリットは十分に理解されず、デメリットがより強く強調されているのではないか。特に教育ではこの傾向が強いのではなからうか。

①「教育の競争」

基本的には、子供たちには多様な能力・性格があり、それをそれぞれに開花させるのが教育です。教育における競争は、学生・生徒の努力を鼓舞し、また各自が得意とする技量を確認するのに有効であり、他方教師には教育についての創意工夫を促すであろう。産業組織論を応用して学区の競争環境と生徒の学力の関係を調べた英国の研究によれば、「競争の激しい学区ほど、学力は高い」という事実が確認されている。

公正で自由な競争は、子供たちの多様な能力を見つけ出すのに有用です。競争がなければ、生徒はどのようにして得意な分野を見つけることができるのでしょうか。また、得意な分野を伸ばすインセンティブが生まれるのでしょうか。かつて、運動会が、例えば50m競走で順位をつけないことが話題になりました。この例に見られるように、教える側は、「教育の競争」を避ける傾向があります。

②「競争の教育」

教える側は、同時に「競争の教育」も回避する傾向があります。なぜなら、「競争は人間性を歪めるもの」と捉え、そしてまた教師間、生徒間、学校間、地域間の

の格差を望ましくないとみなしている。外国では、皆さんと同じような内容、例えば希少性概念、を小学校から教えています。それは、自由社会の経済メカニズムを教えるだけではなく、「公正な競争が行われなくなると、社会はどのようなか」を学習し、政府の役割や企業の社会的責任などを通して、「人間性を養う」ことも大きな目的としています。

このように、競争と教育は重要な関係にある。フィンランドでも、競争原理が働いているからこそパフォーマンスが良いのではないか。もちろん、ついて行けない子供も出てきますが、それをケアするシステムが整っているから、落ちこぼれがないのです。理解格差、学力格差が生まれるのもって直ちに競争を否定するのは間違いである。

経済学は、競争制限を求める者は社会的に正当化できない利益を得ることを示しています。同じように、教育で競争排除をうたう人も利益の享受を求めているはず。競争制限して一番利益を受けるのは誰だろうか。